

万人（出生比は沖縄県についで2位）である。年間の小児外科手術例は40～50例で、それらを県内3施設、県立医大第一外科、磐城共立病院小児外科、本院で治療している。会津地方にはなし。後二者は学会認定施設。各々にNICUが併設（9, 6, 6床）され、前者のみがECMO, NO施行可能である。

小児外科専従医, 認定医, うち指導医は各々, 3, 2, 3人, 0, 2, 2人, 0, 1, 1人であり, 術前後の管理は外科医, 主として外科医, 同小児科医が行っている。

本院の症例（年間約20例）を提示し, その問題点, 及び県内施設間の交流の実態につき紹介した。

8 新生児期に手術を施行した先天性梨状窩瘻の1例

内藤万砂文・広田 雅行・窪田 正幸*

長岡赤十字病院小児外科

新潟大学大学院医歯学総合研究科
小児外科*

まれとされている新生児期発症の先天性梨状窩瘻の男児例を経験したので報告する。

症例は5生日 男

平成15年5月21日, 40週4日, 3156gで自然分娩した。生後12時間位より左頸部にsoftなcystic massが出現, 徐々に増大傾向がみられたため, 5生日に当科紹介入院となる。全身状態は良好で呼吸, 哺乳状態に問題はなかった。左頸部に径4cm大のcysticな腫瘍を認めるが, 皮膚の発赤, 腫脹はなく, 圧痛もないと思われた。呼吸音は良好で努力性呼吸もなかった。WBC 14600, CRP 4.9と炎症反応が認められた。エコー, 単純X線で含気を伴うcystであることがわかり本症と診断した。6生日に減圧tubeを留置し, 炎症消退を待って28生日に摘出術を行った。術後合併症なく42生日に退院となった。

新生児頸部腫瘍の鑑別診断のひとつとして考慮すべき疾患と思われた。

9 鏡視下手術を施行した出生前診断腹腔内嚢胞性疾患の2例

木下 義晶・窪田 正幸・八木 実

金田 聡・奥山 直樹・山崎 哲

松永 雅道*・内山 聖*・倉林 工**

高桑 好一**・田中 憲一**

新潟大学大学院医歯学総合研究科
小児外科

新潟大学大学院医歯学総合研究科
小児科*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
産婦人科**

〔症例1〕在胎36週6日に施行の胎児超音波にて径5cmの腹腔内嚢胞性腫瘍を指摘されていた。在胎40週6日, 体重3346gにて出生。出生後より腹部膨満と胆汁性嘔吐を認めた。保存的治療を行ったところ, 症状は軽快したが, 超音波での計測上, 徐々に増大傾向が認められたため, 29生日, 鏡視下に手術を施行した。肝外性に発育する肝嚢胞であった。

〔症例2〕在胎34週5日に施行の胎児超音波にて径3cmの腹腔内嚢胞性腫瘍を指摘されていた。在胎39週5日, 体重3202gにて出生。出生後の症状はなく, 経過観察していたが, 画像上内部に残渣が認められ, 捻転後の出血性変化や皮様嚢腫の可能性が考えられたため, 57生日, 鏡視下手術を施行した。右卵巢より発生した卵巢皮様嚢腫であった。

本法は嚢腫が大きく, 原発部位が同定困難な場合や, 捻転による変化が疑われる場合, 経皮的穿刺を併せて行うことにより, 安全に少ない侵襲で正確な診断を基とした治療が施行でき, 有用であった。